

岡本太郎と記録芸術  
——油彩《青空》(1954)を中心に——

佐々木 秀憲 (川崎市岡本太郎美術館)

岡本太郎(1911-96)による油彩作品《青空》(油彩・カンヴァス、1954年)は、岡本敏子(1926-2005)の証言によれば1952年の「血のメーデー」をテーマにした作品である。事件から2年後の1954年に一気に描き上げ第39回二科展に初出品された。

《青空》のデッサンは岡本敏子の証言を裏付けている。平仮名を絵文字として描いたデッサンがあり、「ほ」「あ」「ん」の3文字が確認でき、油彩画では画面上位に黒い紐状のモチーフとして描かれている。「ほ」「あ」「ん」とは「保安隊」と考えられ、朝鮮戦争に際して1950年に発足した警察予備隊のことであり、1952年に保安隊となり今日の自衛隊となった。血のメーデー事件とは、警視庁予備隊による銃弾によりデモ隊員が1名死亡した事件であり、「警察予備隊」とは異なるが、当時の岡本には「保安隊」に繋がる組織として理解されたのであろう。油彩画面上位から下位に向かって銃弾が撃たれ民衆を意味する赤い旗へと向かっている。また、デッサンには1954年に新聞紙上を賑わしていた三角翼ジェット戦闘機を描いたものが複数確認でき、油彩画では三角形の青空となって「青空」と「三角翼ジェット戦闘機」とのディペイズマンとなっている。岡本は、このことに気付かせる為に作品名を《青空》としたのではなかろうか。以上により、岡本敏子の証言は確認でき、《青空》は記録芸術であることが判明した。

1950年代の日本では、芸術の諸ジャンルにおいて「記録」が重要なテーマであった(鳥羽耕史『1950年代「記録」の時代』(2010、河出ブックス))。岡本は1957年5月19日に発足した〈記録芸術の会〉の発起人の一人として安部公房、花田清輝らと共に名前を連ねている。

1950年に勃発した朝鮮戦争以降、レッド・パージなど激動する社会を記録した「ルポルタージュ絵画」が活発化するが、その主たる担い手は主に日本共産党員や労働争議に深く関与する芸術家が多かった。一方、運動体「夜の会」以来の盟友である花田清輝らは日本共産党に入党したが、特定の思想に束縛されることを嫌った岡本は入党していない。岡本が《青空》を制作したのは特定の政治思想の為ではなく、戦後日本社会の「逆コース」の様相を、芸術家として黙視できなかった為であると考えられる。同様の事例として、映画監督マキノ雅弘(1908-93)による《次郎長三国志》シリーズの《荒神山》が紙屋牧子氏によって指摘されている(美学会東部会平成25年度第5回例会・研究発表要旨)。

1950年代前半に活発であった記録芸術は、特定の社会政治思想と結び付けて語られることが多いが、岡本やマキノのように、特定の思想信条とは関わりなく、激動する社会の異常さを看過できなかった作家による作品があることを指摘し、記録芸術の多様性を考察する。